

仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News

第十号



ことばとその周辺

第十回

仙台周辺で広く文字にかかわる活動に取り組み、その成果を共有するコーナーです。

「朗読ワールド」

耳を澄まし合う場の空気を。

夕暮れの定禅寺通の喧騒がガラス窓を通してかすかに漏れ聞こえてくる。白い椅子だけが与えられている。マイクもBGMも使わない生の朗読。息づかいさえも聞き逃すまいと、参加者は一言一言の声の行方に神経を研ぎ澄ます。ここでは読み手も聞き手も対等な参加者だ。



「これはできないだろうか?」「ツオイスアーティスト」として朗読やナレーションなどの仕事をしている伊藤富士子さんが「朗読ワールド」を始めたのは三年前。いまは最初の頃からずっと参加している常連も、この夜は何人かが恋愛にちなんだ作品を朗読した。偶然だろうか?「示し合わせたわけでもないのに、その日朗読される作品のテーマが不思議と刷り合ってしまうことが時々あるんです。お互いの声に耳を澄まし合ううちに、何か場の空気がみえないものが共有されていくのかも。狭い窓階段を、誰からもなく「気をつけて」と声を掛け合いつつ降りてくると少し違って聞こえた。(下)

「Iさんはこの日、三回目の参加にして初めて朗読を試みた。これまで何か朗読したかったのに、何を読めばいいのか分からなかった。あの日新聞を眺めていると昔話が目にとまり、「これでもいいのよ」と、記事を切り抜いてきた。「手がプルプル震えてしまいました」と照れたが、聞き手は「目千両」の物語を楽しんだ。好きなエッセイの二節を読む人もいれば、詩を作ってくる人もいる。朗読し、作品への思い入れを語り、順繰りに白い椅子に腰掛ける。誰もが持っている「声」という楽器。そのすばらしさを日常生活に活かす



代表の伊藤富士子さん。「声で人を幸せにしたい」「朗読ワールド」を続けてきた私自身が、声の響き、生の声によって動みされたり、感動させられたり。余韻が1か月経っても私の活力になっているんです。

●毎月第3水曜日の夜に「絵本サロン&ぎやらいMilk」にて開催(要お問い合わせ)
電話(022)264-0045
eメール
world@silverlivedoor.com
(ホームページ)
http://blog.livedoor.jp/world/

学芸室日記

台原森林公園に隣接し、四季折々の樹木や草花が楽しめる文学館の敷地。とくに春はつづじが鮮やかな美しさをみせるというところで、五月二十一日(日)、「文学館の新緑を楽しむ」野点とつづじ」と題するイベントが開催されました。花を眺めながら、野点のお茶と筆の調べを楽しみというみやびな催しです。この春は開花が少し遅れ気味でスタッフは気をもみましたが、数日前からお天気が続き、当日はピンクや白の花々がこま場の皆さんの目を楽しませてくれました。



一味違う文学館のこんな楽しみ方、いかがでしょうか?

の。今年は小説が映画化され、仙台市内でロケが行われたり、新刊の話題にも事欠かない伊坂さん。井上館長とは初顔合わせでしたが、執筆にまつわる裏話や、仙台への思いなど共通の話題で盛り上がり、また、抜き刷りを館内で販売します(一部二五〇円)。

七月十六日(日)、第九回「俳句甲子園(主催・松山青年会議所)の東北ブロック仙台大会が開かれました。岩手県立水沢高校、宮城県名取北高校、仙台白百合学園高校の三校が、「白球」ならぬ「俳句」で対決。試合内容は、自分たちが創作した俳句作品を互いに鑑賞し質疑応答、その一連の流れを審査員が採点するというもの。十七文字の熟詞を制した水沢高校と、投句審査を通過した仙台白百合高校が、八月中旬、愛媛県松山市での全国大会に出場しました。今後も、若い世代の表現活動を応援していきたいと思えます。



松山では惜敗した東北勢。来年は優勝旗の「白河越え」なるか!?

八月十七日(木)、「藤沢周平の世界展」資料借用のため、東京のご遺族のもとにお邪魔した折のこと、原稿や書籍、愛用品が丁寧に梱包され取られたダンボールのひとつに、「お父さんの昔の小説」との書き込みを見つけ、はっとしました。私たち読者は、作家・藤沢周平の素顔が気になり、さまざまなことを知りたくりますが、ご家族にとっては作家も「優しいお父さん」。部屋のあちこちに微笑む「お父さん」の写真が飾られていて、ご家族のなかに生き、そして大切に守られている「藤沢周平」を感じ、少し涙ましくなりました。

特別展 藤沢周平の世界展

11月5日(日)まで



好評開催中

人情と哀歌を端正な文体で描き出した藤沢周平の文学世界。「輝く」の創作メモ、展示では初公開の貴重な資料の数々。ファン必見です。

『読書サロン』(仙台の作家たち)11月18日(土)〜12月27日(水)

藤沢さんは愛されていた

藤沢周平さんくらい編集者に愛された小説家は、そうたくさんはいないのではないかと。人柄は穏やかで、締切をよく守り、書くものにはほとんど駄作がない。これでは藤沢さんを愛さない編集者の方がどうかしている。私もあるとき、藤沢さんが編集者からどんなに愛されているか、知ったことがある。

ビデオテープが売られて古く東西の映画が自宅でも楽しむことができるようになった三十年近く前、そしてビデオ貸出し店がまだ少なかったころのこと、せっせと買い集めた邦画や洋画が棚二つになった。それを知ったある編集者がこう云ってきた。

「近ごろ発売された時代劇のビデオテープで、これはという作品がありますか。あつたら貸してください」

顔見知りの編集者であり、お世話にもなっていたので、よほど東映で優れた時代劇を作っていた工藤栄一監督作品を貸してあげた。しばらくして、藤沢さんと会う機会があり、話題がたまたま映画に転じたとき、藤沢さんが、珍しく高揚して云った。

「工藤栄一監督の時代劇はいいですねえ。彼の映画は、小説を書く上で、ずいぶん参考になりますよ」

おやと思つて聞くと、藤沢さんの観た工藤映画のタイトルは、筆者が彼の編集者に貸したタイトルと一致していた。さらに念入りに、しかしそれとなく聞くと、藤沢さんに工藤映画を貸したのは彼の編集者だった。

そのとき、私はとっさに二つの感想を持った。一つは疑問である。「これは井上さんから借りたものです」と、ひとこと云ってくれたらなんのことはないのに、彼の編集者はなぜ又貸していることを隠しているのか。彼の編集者はなぜ手柄を一人占めしたいのか。そして次にきたのはある種の感動だった。作品の肥やしになりそうなものならなんでも、ウソをついてまでも藤沢さんに捧げようとする編集者としての愛の深さ。藤沢さんの作品は、編集者たちのこういった愛によっても育まれたのだろう。

工藤映画の面白さを、うっとりとする藤沢さんを見てみると、「あれは、ぼくからの又貸しなんですけどね」とは云えず、私はただ黙ったまま、藤沢さんの工藤栄一礼賛のことを聞いていた。

仙台文学館

館長 井上 拓

斎藤茂吉歌集『つきかげ』

詩集、歌集は本の中でもやはり特殊の本で、活字になつて中身が読めればそれでいいというものではない。装丁、造本、活字の大きさとその配置の仕方、こういうもので印象が変わってくる。著者は作品に心をくだくだけでなく、本としての体裁にも気を使う。選集や全集あるいは文庫本になつた詩集歌集ではどうしても不満足で、刊行された本そのものを手に取ってページをめくってみてみたい。

といつてもあまりに過剰にこ

だわるのも妙ではある。ずらりと稀覯本を収集して並べている人がいるが、あれは文学が趣味というより本自体が趣味な人であつたと方向が別である。オーディオメディアが必ずしも音楽愛好家でないようなものだ。

わたしは、学生時代から短歌を作つてきたが、しばらくの間は斎藤茂吉などぜんぜん関心がなかつた。四十歳過ぎてから読みだし、にわか面白くなつた。茂吉の文学は、いわば大人の文学である。年相応になら



歌集『つきかげ』
齋藤茂吉著(若波書店)

ないと味わいが伝わらない。神田の古書店街を回ると茂吉の歌集をしばしばみかける。値段も二千円とか三千円とかそんなものである。その都度一冊また一冊と求めてカバンの中に突っ込んで通勤電車などで眺める。小説を読むように最初のページからきちんと読むのではなく、任意のページをひらいてそこにある歌を眺める。一ページ三首組なので見開き六首である。六首を眺めてあれやこれや考えているといつか降りる駅についている、という感じで読んでいった。歌集の現物で読んだということが大きかつた。

茂吉全集では二ページ八首、それぞれ一行で組まれている。歌集では一ページ三首をそれぞれ二行に組む。二行なので目が折り返されるが、この折り返す「間」が歌の印象をずいぶん違うものにする。全集で接するよりどの歌も魅力が増すように感じる。ふしぎなものである。「赤光」から「つきかげ」まで茂吉には十七冊の歌集がある。このうち歌人斎藤茂吉の、というより近代の短歌の成立を告げた「赤光」と、敗戦の悲傷を自然詠の中に刻み付けた「白き山」が茂吉山脈の二大高峰としてつとに世評高い。しかし、わたしの目には最後の「つきかげ」という歌集がもっともおもしろく映つた。「つきかげ」は疎開先から帰つてきた昭和二十三年から死ぬ直前の昭和二十七年までの歌を収める。没後に編まれ昭和二十九年二月二十五日、つまり

茂吉一周忌の日付をもって岩波書店から刊行された。「白き山」で様式美の極みのような名品秀作を達成した後、すなわち一代の劇のこの上ないクライマックスの後、戦後のカオスの真只中で茂吉はもう一回生き直す。戦後の思想的物質的混乱と自身の老いを奇妙に併走させ、肩の力が抜けて奔放自在というか、人をくつたような、トボけたような歌を淡々と詠んだ。それが「つきかげ」の歌である。

人間は予感なしに病むことあり癒れば楽しなほらねばこまる

税務署へ届けに行かむ道すがら馬に逢ひたりあゝ馬のかほ店頭に蜜柑うづたく積みかさなり人に食はるる運命が見ゆ

散文でも短歌でも茂吉の作物には一種えもいわれぬ独特の

おかしみというか愛嬌があるが、「つきかげ」の歌はとりわけその要素に富み、しばしば声をあげて笑つた。それは病氣になれば誰とて「なほらねばこまる」。しかしそれをこんなに平然と結句に据えるのは奇観に属する。確定申告に税務署に行くのと路傍の馬にどんな関係があるか。しかし、馬の顔さえなんとなくいまはおもしろくないのである。三番目の歌は有名なが、店先のミカンの山を見るたび思い出しては愉快になる。

こういう歌に接してひじょうな刺激を受けた。短歌というもの知らなかつた側面、諧謔とかユウモアとか批評性とかいう側面についてじぶんの作歌方向が変わつていったと思う。形式そのものが本来的にもつ一種のおかしみについて、覚醒させられたといつてよい。

アルブレヒト・デューレルが一五〇〇年に描ける青年ひとり

円柱の下ゆく僧侶まだ若くこれより先きいろいろの事があるらむ

洞窟の中にとぼれる太き蠟燭聖者ひとりねにねる時に消ゆ

そしてその一方にこういう清潔な、しかし老いの方感を秘めたおそろしい歌がある。なんのこだわりもなくさらさら楽しく書きつけたような歌と、垂直に降ってくる雫のような迫真力を

たたえる歌と、平気で一冊に共存している。それはこの小さな詩形が秘めもつところの大きな幅、そのマキシマムである。

わが色欲いまだ微かに残るころ渋谷の駅にさしかかりけり

小池光(歌人) 1947(昭和22)年、宮城県柴田町生まれ。東北大学文学部短歌研究会に加入。現在、同誌編集人。おもな歌集に『バルサの翼』(現代歌人協会賞)、『草の庭』(斎藤茂吉短歌文学賞)、『時のめぐりに』(遠空賞)、『酒濁集』(斎藤茂吉短歌文学賞)、『時めぐりに』(遠空賞)、評論集に『短歌』(現代歌人協会賞)、『茂吉を読む』など多数。



上山草人画 谷崎潤一郎書「河豚図」

庄司潤子(仙台文学館学芸員)

河豚提灯の絵と戯れ歌からなる一枚の色紙。墨絵の作者は、仙台出身の俳優でハリウッドスターとして知られた上山草人(明治十七年〜昭和二十九年)、歌は作家・谷崎潤一郎(明治十九年〜昭和四十年)の筆による。

草人は宮城県第二中学校時代から句作に励み、文芸への興味を深めていた。芸名の「草人」もこの俳号である。早稲田大学在学中から演劇を志し、坪内逍遙の文芸協会に入るが間もなく離脱。自ら近代劇協会を

設立して、帝国劇場で「ファウスト」を上演し、日本近代劇の先駆けとなつた。しかし、興行の失敗などで負債がかさみ、谷崎と懇意になつた大正五、六年ころは、新橋駅近くに化粧品店を出して何とか糊口をしのいでいた。一方の谷崎は、すでに「刺青」「お艶殺し」などを発表し、耽美主義文学の旗手として文壇の注目を集めていたが、実生活と芸術との狭間で悩み、作家としての自己を模索していた。戯曲「誕生」をもって創作活動に入った谷崎が、演劇界の草人と親し

くなることに障壁はなかつた。二人は早稲田派の文士の会合で知り合い、谷崎が俳優を志す友人を連れて草人を訪ねたのを機に親密な付き合いを始めた。草人の家に谷崎が居候し、事務所のように使っていた時期さえあつたという。大正八年二月、いよいよ食い詰めた草人は渡米、ハリウッドにその活動の場を求めた。十一年後、草人の華々しい凱旋帰国にあたり、谷崎が記した「草人を迎へに行く日」(昭和四年十二月「大阪朝日新聞」)は、

「草人がいよいよ帰ってきた」と起筆し、「明日こそは君を迎へに、そして土産の猫を貰ひに行く」と結ぶ。歓迎の気持ちにあふれ、ユーモラスな筆致で書かれたこの一文には、草人の雌伏時代を知る友人ならではの喜びが滲む。

その後、旧交を温める酒宴で二人が記したこの色紙。そこには辛苦をわかちあつた友情の記憶が染みついて

「高村光太郎のみちのく」

北川 太一

季節はずれの雪

「連翹忌」という、高村光太郎さんのご命日の集まりを今年も東京で行いました。亡くなったのは五十年前の四月二日。そのころ高村さんは東京の中野に、「新制作派」の画家で、故人の中西利雄さんのアトリエを借りて住んでいました。庭の真ん中には大きな連翹の株があって、黄色い花が真っ盛りだったんですが、その前の日が東京では珍しい大雪です。もう目の前が見えないくらい吹雪。一面に吹き巻いた重たい大粒の春の雪が夜中にほほ上ると、東京のあのこみこみした街が降りつもった雪で真っ白



に、清浄になったという感じがしました。真夜中の三時四十五分という時間でしたが、亡くなった時には身寄りの人は誰一人付いていませんでした。大急ぎで駆けつけたアトリエで、付き添いの看護婦さんに瘦せた体を拭かれていたのを隣の部屋で見ながら、ものすごく寒くて、これは気温も寒いんですが、何となくもうちよつと違う意味で、——みんなで震えていたような気がします。当時は武者小路実篤さんとか志賀直哉さんとかがまだお元気でした。皆さん、東京の居心地のいいお家で、お孫さんたちに囲まれて、文学の神様とか何とか言われて恵まれた晩年を送っていらつした。その一方で、高村さんは借りたアトリエでたった一人で、まるで昭和の初め大正の終わり頃に結核で血を吐いて斃れていった若い絵描きさんたちのように、仕事に夢になつて、病気で死んでいった。しかし、

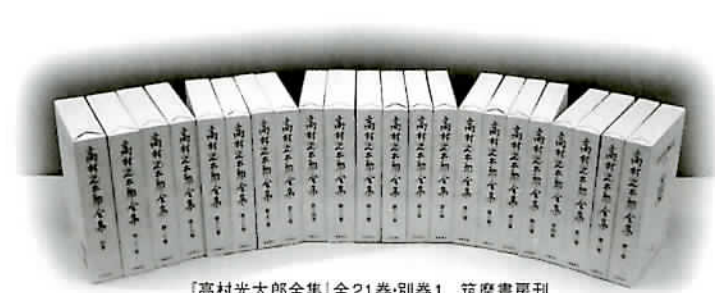
それは高村さんが自ら選び取った道でした。彫刻をつくつてそれをお金に換え、自分のアトリエを設けて裕福に暮らそうと思えば、それは多分できたんだろうと思えます。

ただ高村さんは、みちのくの、あの素朴な自然と人が大好きで、みんなが勧めたのにそこからどうしても東京に出て来ようとはしなかつたんです。高村さんは、例の十和田湖畔の裸婦像を作るために昭和二十七年から東京に帰つていました。それまでの七年間は岩手に疎開して住んでいたのですが、会う度に「東京はいやだ、東京はいやだ」って言っていました。

その日の雪は、だからまるで、みちのくの天から高村さんを迎えて来たような、そういう感じの雪でした。

二つの「天」

高村さんはよく、「自分は江戸っ子だ」と言っていました。そ



「高村光太郎全集」全21巻・別巻1 筑摩書房刊

して、自分は江戸っ子なんだけれども、東北の人たちの気性、東北の人たちの魂と何かととても重なるものがあるんだってことを、いつも言っておりました。その高村さんが昭和三年、「若草」という少女向けの雑誌——竹久夢二が表紙を描いた人気雑誌です——の九月号

で、自分は江戸っ子の中はやつてこないだって言っているのです。ずいぶん古い時期ですよ、明治三十年代です。しかも、志を同じくするならば仏教の人でも神道の人でも自分の友だちだ、キリスト教にはこだわらないとも。「世界ゼンたいが幸せにならないうちは、個人の幸せはありえない」と言った宮澤賢治と、まさに「同じ天」の下の人間という気がしますね。

高村さんはよく色紙に「美ならざるなし」と書きました。それは奥達の「生命は美ならざるなき也。如是の美なる生命、天上天下誰か得て奪わん（命というものは美しいものだ。そういうものを誰が奪い取るか）がで

せ、本当の宇宙平等の世の中はやつてこないだって言っているのです。ずいぶん古い時期ですよ、明治三十年代です。しかも、志を同じくするならば仏教の人でも神道の人でも自分の友だちだ、キリスト教にはこだわらないとも。「世界ゼンたいが幸せにならないうちは、個人の幸せはありえない」と言った宮澤賢治と、まさに「同じ天」の下の人間という気がしますね。

きようか」という言葉とも共鳴しています。 ※平成十八年五月十三日の講演から、一部の要旨をまとめたものです。



北川太一（きたがわ たいち） 文芸評論家。1925（大正14）年、東京都生まれ。東京工業大学卒業。晩年の高村光太郎に親しみ、草野心平らと光太郎の資料の収集、整理、刊行などにたずさわる。「高村光太郎全集」の編集を手がけたほか、没後間もなく設立された高村光太郎記念会の事務局長をつとめる。著書に『詩稿「暗愚小伝」高村光太郎』『高村光太郎ノート 画学生智恵子』『高村光太郎ノート 新俳明者光太郎』など多数。

この年、昭和三年の六月には治安維持法が改「悪」され、死刑も加わって、罰則が強化されています。日本という国がとて大きな曲がり角に差し掛かっていたそんな大変な時期に、高村さんは「天」なんてことをあらためて若い女性たちの雑誌に書き、たとえ一人の力ではどうにもならないようなことが起ころうとも、人間というものは思ったまま見たままを自由に、自分の本性を力一杯伸ばして生きることが大切なんだって言おうとしたんだと思うんですね。

「智恵子は東京に空が無いといふ」で始まる有名な詩「あとけない話」が書かれたのは、このエッセイの数か月前のことでした。実はこの詩が書かれたのは、智恵子さんの福島の実家が税務署の指示で競売になったその日なんです。けつしてあとけない、本当に大変なときにつくられた詩なんです。

智恵子さんは、少し体の具合が悪いと郷里の家に帰って、そこで体を養って、もう一度高村さんと一緒に、いわば人間としての生き方を追い求める、美を追い求める生活に帰ってきていました。

ところが智恵子さんにはもう家もない。帰って憩うべき場所もない。智恵子さんを育てた安達太良山の上の空とも、今まさ

に別離しなければならぬ。そういう智恵子さんに対する篤いいたわり、抱きしめるようないたわりが「あとけない話」にはあるのです。これはただのおとぎ話のような詩ではありませぬ。安達太良山の上の空のすばらしさは、実は智恵子さんという人のすばらしさとイコールなんだというところ、智恵子の目にはいつも安達太良山の空があったということ、その智恵子を思いやる胸いっぱいの高村さんのかなしみが感じ取れなければ、「智恵子抄」はよく分からないだろうと思えます。

「美ならざるなし」

そういう意味ではみちのくの空というのは非常に独特で、日本の中でも大きな部分を占めているような気がします。そんなみちのくの空の下に生まれた多くの人々と、高村さんは深い関わりをもちました。

仙台の生んだ特異なキリスト教徒、新井與逸もその一人です。彫刻家の荻原守衛や、長く東北学院の教壇に立ちダンテの神曲を訳した山川丙三郎らの師に当たる人です。

高村さんのニューヨーク時代からの親友に、柳敬助という洋画家がいます。智恵子さんを高村さんに紹介した柳八重子

イベント 「朗読と音楽の調べ」 ～高村光太郎特集～

朗読/石川裕人 ギター/佐藤正隆

仙台を拠点に幅広い演劇活動に取り組む石川裕人氏(TheatreGroup"Oct/Pass"主宰)と、クラシックに留まらず多くのジャンルのミュージシャンと意欲的に競演している仙台出身の若手ギタリスト佐藤正隆氏のお二人による「朗読と音楽の調べ」が、「高村光太郎・智恵子展」の関連イベントとして行われました。

石川さんが朗読する「樹下の二人」「ぼろぼろな駝鳥」「レモン哀歌」はじめ15作品の朗読と、佐藤さんの奏でるドビュッシーの「月の光」などの名曲が、エントランスホールの吹き抜けに響き渡り、「高村光太郎・智恵子展」の世界にいつそうの奥行きを与えてくれました。



平成18年4月23日に開催されました。

文芸誌『玄土』——その創刊前夜

本多真紀（仙台文学館学芸員）



玄土の創刊者たち。左から、三浦一萬、佐藤忠雄、山田三郎、佐藤伸。4人は同級生で、台一中の同窓会であった。

当館では、仙台で『玄土』の編集にあたった三浦一萬のご遺族から、同人たちの書翰・原稿・グラなどを一括でご寄贈いただいた。ここではその一部をもとに、若き同人たちが手探りで一冊の雑誌を創刊するまでの経緯をたどってみたい。

創刊への機運

「私達の会の様なものが一つあつても好いのね」／「有るのがほんとうなのはどうしてないのせう、一つ僕達だけで雑誌でも出して見ませうか……」／「イエ出しませう、そんなになつたらどんなに好いでせう石原先生もお話すればキツト喜んで助けて下されますわ……」／「そう、そうして下されば好いね、郷土のためにそして自分達のために奮発して見様ぢやありませんか……」(※2)

欲をかきたて、そして石原を巻き込み、実現の方向へ大きく始動していく。

雑誌にかける思い

年が明けて、雑誌発行に賛同するメンバーによる会議が数

大正九（一九二〇）年八月、仙台において文芸誌『玄土』（読み方は「くろつち」「げんど」の両説がある）が創刊された。北国（玄）の漢字には「北」の意味もある）に文学芸術の種を蒔き、根付かせる趣旨で出された同人誌である。創刊号の表紙は洋画家の真山孝治が手がけ、誌面には、歌人の石原純や原阿佐緒、のちに詩人として活躍する尾形亀之助らの短歌のほか、地元若者たちの詩歌を中心とする作品が並んでいる。

当館所蔵の『玄土』は、創刊号から大正十一（一九二二）年三月までの六冊が仙台で発行され、同年六月からは発行が東京に移り、大正十二（一九二三）年三月に終刊となったという。『玄土』が仙台で出された期間は一年にも満たないが、多くの若者が理想と情熱に燃えて参加したことは、大正期の仙台の文学運動において清新な出来事であった。



『玄土』創刊号

「一年にも満たないが、多くの若者が理想と情熱に燃えて参加したことは、大正期の仙台の文学運動において清新な出来事であった。」

「石原や阿佐緒など名の通った歌人も参加した『玄土』は、若い親父たちにとって、まさに夢を叶えた雑誌だったと思えます」と語る。三浦が終生大切に保存していた『玄土』をめぐる数々の資料は、一冊の同人誌をめぐる仲間たちの思いと、その舞台裏を今に伝えている。

「『玄土』の記録をめぐって」（叡智の社）第3号、平成十八年三月宮城県図書館蔵

*2 真山孝治「同人雑記」（『玄土』創刊号、大正九年八月）

*3 大正八年九月に東京で創刊された文芸同人誌。石原純も寄稿していた。

*4 2に同じ

*5 三浦一萬「同人雑記」（『玄土』第一巻第二号、大正九年九月）

三浦一萬に編集の指示を記した石原純の手紙。大正9(1920)年3月31日付

難航する作業

待望の『玄土』創刊号は、当初大正九年四月の発行予定であった(※4)。しかし、実際には八月まで延びてしまった。その理由を推測させる石原の書簡が残されている。

「……印刷所のことどうなりましたか、心配してゐます……」(大正九年四月十七日付)

「その後印刷所の方、どう云ふ都合だか心配してゐます。六月号として早く出したいものですが、御骨折を願ひたいものです……」(同五月十七日付)

「……印刷所のことどうなりましたか、心配してゐます……」(大正九年四月十七日付)

「石原や阿佐緒など名の通った歌人も参加した『玄土』は、若い親父たちにとって、まさに夢を叶えた雑誌だったと思えます」と語る。三浦が終生大切に保存していた『玄土』をめぐる数々の資料は、一冊の同人誌をめぐる仲間たちの思いと、その舞台裏を今に伝えている。

「『玄土』の記録をめぐって」（叡智の社）第3号、平成十八年三月宮城県図書館蔵

*2 真山孝治「同人雑記」（『玄土』創刊号、大正九年八月）

*3 大正八年九月に東京で創刊された文芸同人誌。石原純も寄稿していた。

*4 2に同じ

*5 三浦一萬「同人雑記」（『玄土』第一巻第二号、大正九年九月）

回到わたって開かれた。石原が三浦に宛てた三月二十三日付のはがきに、「……雑誌『玄土』の件につきいろいろ御願ひしたきことがありますので……」とあることから、誌名はこの時点までに決定していたようだ。資金面での壁も立ちほだかったが、何とかクリアして話は進み、編集作業は、新聞記者としての経験や幅広い人脈を見込まれた三浦が任されることになった。三月末、三浦は次のような誌面の構成や割付についての指示の手紙を石原から受け取っている。

「一、歌の組方は「行人」(※3)に依ること。……一、小説の組方は五号活字ならば十七行四十六字詰、ポイントならば十八行にて字数は五号に相当するだけにする。……一、創刊号は左の如く二頁にわたる枠をとり上下左右をあけて組むこと……扉絵を先日真山氏と話しあつてあるうちに、こゝに封入したロダンの彫刻にしたかどうかといふこととした……先日のレムブランドのは他日に入れたらどうでせうか(大正九年三月三十一日付)

このようなりとりからは、自分たちの手で雑誌を「一から作り出すのだという、同人たちの意気込みや思い入れが伝わってくる。

「……印刷所のことどうなりましたか、心配してゐます……」(大正九年四月十七日付)

「……印刷所のことどうなりましたか、心配してゐます……」(大正九年四月十七日付)

「……印刷所のことどうなりましたか、心配してゐます……」(大正九年四月十七日付)

「……印刷所のことどうなりましたか、心配してゐます……」(大正九年四月十七日付)

「父の日の青空はあり山根の木」